

令和2年度 山口県立岩国総合高等学校 学校評価書 校長(大田真一郎)

1 学校教育目標
教育目標 ○たくましく生きる力の育成 ○個性豊かに生きる力の育成 ○心豊かに生きる力の育成 中・長期目標 校訓「自立」の具体化を図り、時代の変化や社会の進展に対応できる人間の育成 ○めざす学校像 ・一人ひとりの夢の実現をめざす。 ・新しい教育スタイルを常に求める。 ・地域社会に貢献できる人材を育てる。 ○育てたい生徒像 「基礎学力」をはじめ、「学ぶ力」「考える力」「表現する力」「行動する力」と「生涯学び続ける力」を身に付け、進路を獲得して、21世紀をたくましく生き抜き、自立した人間として社会に貢献できる人

2 現状分析 (前年度の評価と課題を踏まえて)
<p>校務分掌を、教務課、総務課、推進課、学校安全・体育課、進路課の5課体制に改編したことにより業務分担の偏重を修正することができた。</p> <p>また、主体的・対話的で深い学びをめざした授業改善、多様性を尊重したガイダンス及び進路指導、生徒の主体性を重視した特別活動、コミュニティ・スクールによる地域との連携強化、開発的・予防的な生徒指導・教育相談・特別支援教育、年間計画に基づく保健安全指導の実践等に取り組むことはもとより、総合学科の特色である「産業社会と人間」「Wise Person21(総合的な探究の時間)」「課題研究」を柱とする系統的なキャリア教育を各年次で実践する上で、その系統性を再確認するため、本年度から導入するキャリア・パスポートの作成を機に、全校での共通理解が図れるよう取組の整理を行っていく必要がある。</p> <p>さらに、複雑化する教育環境にあって、学校業務の精選・工夫による持続可能な取組の在り方、新学習指導要領や高大接続改革を踏まえた教育課程の編成、多様な生徒のニーズに応じた支援への協働体制整備、部活動の適正な運営に基づく活性化、情報モラルの充実を通じたコミュニケーション能力の育成など、多岐にわたる課題の解決に向けて、共通理解を図りながら進めていく必要がある。</p> <p>【学習指導】 ○生徒の学習意欲の向上を図るとともに、教科内・教科間で連携して、主体的・対話的で深い学びをめざした授業改善に取り組む。 ○動画学習の効果的な活用に努め、朝学や家庭学習の充実を通して、学力向上を図る。</p> <p>【生徒指導】 ○開発的・予防的な生徒指導、情報モラル教育の推進により、社会性や自己指導能力を育み、いじめや問題行動の未然防止を図る。 ○個々の生徒の特性を踏まえた指導・支援に協働して取り組むとともに、自他の人権や生命を尊重する態度を養う。</p> <p>【進路指導】 ○進路情報を適切に提供し、満足度の高い進路決定・進路実現をめざしたきめ細かな指導・支援に取り組む。 ○各分掌や年次との連携強化を図り、キャリアガイダンスの充実を図る。</p> <p>【保健・安全指導】 ○喫煙の感染症拡大防止対策等を通して、保健安全への意識を高め、自らの健康を守り育てる実践力の向上を図る。 ○清掃活動(ボランティア活動を含む)の充実・校内外の施設整備・環境美化を推進する。</p> <p>【学校運営、特色ある学校づくり】 ○総合学科の特色ある取組の意義や目的を明確化し、3年間を見通した計画的・系統的な取組の整理・充実を図る。 ○コミュニティ・スクールの仕組みを活用し、連携による教育活動の質の向上を図るとともに、積極的な情報発信に努める。</p> <p>【業務改善】 ○業務の精選・効率化を進め、学校運営・教育活動の質の一層の向上を図る。 ○日常の健康観察に努め、健康管理に対する意識の高揚を図るとともに、休暇等が取得しやすい環境づくりを推進する。</p>

3 令和2年度 重点目標
○3年間を見通した「キャリア教育」推進の視点で、教科・分掌・年次間の連携を強化する。 ○生徒の主体性を育む教育活動の充実を図る。

4 自己評価					5 学校関係者評価		
評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
学習指導	学習習慣を確立させる。	・臨時休業期間を含めた家庭学習内容及び時間等の調査を行う(7月まで)。 ・調査結果を分析し、教員研修会を実施する(夏季休業中)。 ・具体的対策を実施する(8月以降)。 ・授業アンケートを実施する(12月)。 ・スタディサプリの視聴状況を把握し、視聴できていない生徒へ声掛けを行う。	授業評価アンケートにおいて、「家庭学習時間が0分である」という回答が、 20%未満である・・・4 20%以上30%未満である・・・3 30%以上40%未満である・・・2 40%以上である・・・1	4	第2回家庭学習調査の結果から、「家庭学習時間が0分である」という生徒の割合は、8%であった。昨年度よりかなり改善された。特に、1年次生は家庭でもよく学習していた。来年度も家庭での学習習慣を確立させるために年次・教科と連携していきたい。また、宿題だけでなく、自主的に行う予習や復習を行う生徒が増えるような取組も考えていきたい。	○昨年度と比べて改善度がすばらしい。今後も継続してほしい。 ○主体的に学ぶ力を伸ばすことが大切だと思う。 ○自己申告ではあるが宿題をやってくる生徒が多くなることはよいことである。	A

生徒指導	多様性の中で自他を認め、他者と自分を尊重できる力を養う。	総合学科の特色である多様な選択を経験することにより、判断力を養うとともに、自己肯定感を高め、他者を尊重する力を身に付けさせる。	4: Fitによる対人適応感の要注意・要確認の人数が20人未満 3: Fitによる対人適応感の要注意・要確認の人数が30人未満 2: Fitによる対人適応感の要注意・要確認の人数が40人未満 1: Fitによる対人適応感の要注意・要確認の人数が40人以上	4	・6月、3年9名、2年4名、1年5名、計18名 ・10月、3年8名、2年7名、1年9名、計24名 ・12月、3年6名、2年1名、1年5名、計12名 人数は多くないが、要注意・要確認の生徒を中心に継続観察が必要である。	達成度4は素晴らしいことである。	A
	いじめの早期発見・早期対応に努める。	偶数月(年5回実施)にいじめに関するアンケートや奇数月(年6回)Fit(生活アンケート)、年間3回の個人面談等により、早期発見し素早く対応する。	4: アンケートによるいじめ発生の記載が全く見られなかった。もしくはいじめ発生後1週間以内に発見、即日対応及び継続指導できた。 3: アンケートによるいじめ発生の記載が全く見られなかったが、いじめ発生後2週間以内に発見、即日対応及び継続指導できた。 2: アンケートによるいじめ発生の記載が全く見られなかったが、いじめ発生後1か月以内に発見、対応及び継続指導した。 1: いじめ発生後、発見までに1か月以上かかった。	4	把握できないいじめに関すると思われる行為は5件であり、すべての事案について迅速に対応し、現在経過観察中である。	○いじめについては引き続き即時対応をお願いする。 また、対応後もしっかり見守ることが大切であると思う。 ○アンケートのアフターケアはどうしているか。 →担任等が面談し、しっかり観察しながら個別に対応している。	
	ルールや規範の意義を理解し、自主的な規範意識の醸成を図る。	頭髪服装指導を定期的に行い、また学校行事や全校集会等を通じて、規範意識の大切さを考えさせ、ルールを自主的に守ることの必要性を認識させる。	4: 頭髪服装違反者が各年次15名未満 3: 頭髪服装違反者が各年次25名未満 2: 頭髪服装違反者が各年次35名未満 1: 頭髪服装違反者が36名以上の年次あり。	3	1回目、3年21名、2年17名、1年14名 2回目、3年9名、2年9名、1年17名 3回目、3年9名、2年18名、1年18名 各学年とも爪の違反者が多い。ケガにつながる可能性もあるため今後も引き続き指導していきたい。	○爪の違反はその場で切らすことはできないのか。 →家で切るように指導している。 ○日々のきめ細やかな指導に感謝している。	
進路指導	主体的に進路実現をめざす態度の育成	各年次と協力して、校内ガイダンスを実施し、生徒が積極的に進路について考える態度を養わせる。	生徒アンケートにより、学問理解や職業・職種理解について、 4: 「役に立った」という回答が90%以上であった。 3: 「役に立った」という回答が70%以上であった。 2: 「役に立った」という回答が50%以上であった。 1: 「役に立った」という回答が50割未満であった。	3	・4月の2、3年次対象のガイダンスは、コロナによる臨時休校のため、実施していない。11月の2年生対象のガイダンスのアンケートでは、「とても役に立った」という回答が83.9% 「まあまあ役に立った」という回答が15.6% 「あまり役に立たなかった」という回答が0.5% 「役に立たなかった」という回答が0.0% ・進学や就職についての全体的な説明とともに、上級学校や企業の方のお話も聞け、生徒が進路を具体的に考えるよい機会となったと思われる。	○評価以上によく指導していただいているように思う。	
	面接や小論文の練習を通じた、自己理解と希望する進路の理解の深化	面接指導や小論文指導の練習機会を多くつくり、進路実現に向けて努力させるとともに、生徒が自分の進路や自分自身について深く考えられるように指導する。	4: 面接練習、小論文練習をした回数がそれぞれ5回以上行った生徒が80%以上であった。 3: 面接練習、小論文練習をした回数がそれぞれ5回以上行った生徒が60%以上であった。 2: 面接練習、小論文練習をした回数がそれぞれ5回以上行った生徒が50%以上であった。 1: 面接練習、小論文練習をした回数がそれぞれ5回以上行った生徒が50%未満であった。	1	・約8割の生徒が、進学試験や就職試験で面接試験を受け、約2割の生徒が進学試験で小論文試験を受けている。 ・面接練習の回数は、5回以上(42.1%)、3~4回(39.5%)、1~2回(11.8%)、0回(6.6%)であった。 ・小論文練習回数は、5回以上(21.1%)、3~4回(36.8%)、1~2回(31.6%)、0回(10.5%)であった。 ・進路指導等の仕組みとして、就職指導ではほぼ全員が5回以上の面接練習を計画できたが、進学の面接練習や小論文練習では、3~4回程度の練習計画にとどまった。来年度は教員からの声掛けもさらに行うなど、生徒が自主的に練習する雰囲気醸成したい。	○生徒の自主性に任せるということは難しいということがわかり、次年度の課題が明確となったと思う。 個々の能力に合った指導が必要と思う。 ○回数だけで判断するのよくないの で、取組の体制を改善していけるとよい。 ○評価基準の整理をすることも必要ではないかと思う。	
保健・安全指導	体力・健康の維持及び、健康についての意識の向上	手洗いやうがい等の生活習慣を身につけるように、授業等で指導する。体育授業等で定期的な体力トレーニングに取り組ませる。	4: 1か月の欠席率が2%未満 3: 1か月の欠席率が3%未満 2: 1か月の欠席率が4%未満 1: 1か月の欠席率が5%以上	4	・6月0.6% 7月1.1% 9月1.7% 10月1.3% 11月2.3% 12月1.8% 11月の欠席率が高いが、季節の変わり目であり気温が低くなったことがあげられる。 ・欠席率が低かった理由として、コロナの関係で出席停止者が多かったことが考えられる。	○欠席する生徒も少なく、とてもよいと感じた。	
	衛生的な教育環境への意識を高める。	日常の清掃活動や委員会活動(1か月に一度、生活委員による衛生チェック)等により、校内の環境美化をすすめて維持していく。	4: 不衛生な場所が3か所未満 3: 不衛生な場所が5か所未満 2: 不衛生な場所が7か所未満 1: 不衛生な場所が8か所以上	3	毎月平均して3か所以上ある。日常生活に関係する場所として、部室の中がちらかっていることがあげられる。また、グラウンドや渡り廊下に落ちている小動物のフン、トイレや排水溝の臭いなどがあげられる。これらの中で改善したものもあるが、未だ対応中のものもある。	○前回ゴミ箱の設置について提案があったがその後はどうなったのか。 →教室には常設していないが、掃除の時間に廊下に設置している。 ○消しゴムかすは毎時間持ち帰っているのか。 →持ち帰るように指導している。	
	安全や防災についての意識を高める。	毎月の点検や防災訓練を通じて、学校生活だけでなく、家庭や将来の職場での安全や防災意識をもつ。	4: 月1回の点検で危険、破損個所がない。 3: 月1回の点検で危険、破損個所が2か所未満 2: 月1回の点検で危険、破損個所が3か所未満 1: 月1回の点検で危険、破損個所が4か所以上	3	破損個所で多かったものは、床のはがれ、カーテンや窓の不具合、天井の破れであった。その他の破損も合わせて、校務技師に依頼し対応した結果、破損個所は月毎に減少した。	○破損個所は少ない方だと思う。安全に学校生活を過ごさせているのはよいことである。	

各年次	3年次 ・基礎学力を向上させ、主体的に学習に取り組む姿勢を身につけさせることにより、希望する進路が実現できるように、生徒に寄り添い行動する。	スタディサプリに積極的に取り組む事で、基礎学力を向上する。	4：学年の8割が年間視聴時間80時間を超して学習に取り組んだ。 3：学年の8割が年間視聴時間60時間を超して学習に取り組んだ。 2：学年の8割が年間視聴時間40時間を超して学習に取り組んだ。 1：学年の8割が年間視聴時間20時間を超して学習に取り組んだ。	2	・4月1日から1月27日までの期間において算出 80時間以上が52名(52%) 60時間以上が69名(69%) 40時間以上が84名(84%) ・総数は99名。進路決定後より視聴時間が極端に減り、評価2となってしまう。見ていない生徒への指導や、3年次の視聴への工夫等をもっと少し考える必要があった。なお最高視聴時間の生徒は360時間であり、多くの生徒は一所懸命に取り組んでくれた。	○3年次のスタディサプリを使った効果や結果をどのように検証しているのか。 →スタディサプリを予習として使い、授業やテストへの対策に役立っている生徒が多い。また、視聴時間の多い生徒は成績も向上している。	A
		・課題研究や週間計画表に主体的に、計画的に取り組むことにより、将来にわたる学びつづける力と現代社会を見通す眼を作りだす。	4：課題研究や週間計画表への取り組みから、主体的に取り組む姿勢が感じ取れ、学年の生徒の成長を強く感じ取ることができた。 3：課題研究や週間計画表への取り組みから、主体的に取り組む姿勢が感じ取れ、学年の生徒の成長を感じ取ることができた。 2：課題研究や週間計画表への取り組みから、学年の生徒の成長を感じ取ることができた。 1：学年の生徒の成長を残念ながら感じ取ることができなかった。	4	・課題研究の取組は担当者の緻密な計画により、充実した指導を行った結果、生徒の頑張りや変化を引き出すことができ、多くの生徒が社会問題に関心をもって、将来も学び続ける力をつけることができた。 ・毎週の週間計画表を習慣的に提出させることとコメント記入を通して、生徒に寄り添い行動していくことができ、生徒の希望進路実現に寄与した。	○課題研究の評価はどのように行われているのか。 →ルーブリックを活用して、基準を統一して明晰に評価している。 ○プレゼンテーションステージの発表はとてすばらしかった。	
	2年次 ・自ら考え、主体的に取り組む姿勢の涵養 ・互いを認め合う気風の醸成	・「自立」を基本に据えた学校生活の構築 ・横断的に学習する機会の設定 ・バズセッション等による相互啓発の推進 ・年次生徒による自治的活動の展開 以上を有機的に関連させつつ、総合的に取り組む。	4：左の観点に関する個人の成長とそれによる集団の力量の高まりが日常の言動から強く感じ取れ、生徒たちの文章の中にも年度当初のそれと比較して飛躍的な内容の深化が認められることを、職員の協議によっても結論づけることができる。 3：左の観点に関する個人の成長とそれによる集団の力量の高まりが日常の言動から感じ取れ、生徒たちの文章の中にも年度当初のそれと比較して内容の深化が認められることを、職員の協議によっても結論づけることができる。 2：左の観点に関する個人の成長とそれによる集団の力量の高まりが日常の言動から時折り感じ取れ、生徒たちの文章の中にも年度当初のそれと比較して内容の深化が部分的に認められることを、職員の協議によっても結論づけることができる。 1：左の観点に関する個人の成長とそれによる集団の力量の高まりが日常の言動から稀に感じ取れ、生徒たちの文章の中にも年度当初のそれと比較して内容の深化が僅かに認められることを、職員の協議によっても結論づけることができる。	3	・個人レベルでは、自分自身とその生活を大切に育もうとする生徒が増加したことが、日々の対話や文章の中から感じ取れる。 ・集団としての力量も、生徒同士の関係の質が向上するにつれて飛躍的に高まり、互いに支えあう気風が醸成されつつある。	○コロナ禍では自主的活動も制限されたと思う。その中の修学旅行中止はやむを得ないと思う。	B
	1年次 ・基本的な生活習慣の確立 ・自ら考え、主体的に取り組む姿勢の醸成	・連絡帳を活用し、自分の学校生活をマネジメントする。 ・生活記録表を記入することで、主体的に学習に取り組む。	生徒アンケートによる、取組に対する 4：肯定的評価が80%以上 3：肯定的評価が60%以上 2：肯定的評価が40%以上 1：肯定的評価が40%未満	3	・連絡帳を記入させることにより、生徒が課題や提出物の期限を守って提出することに効果があった。 ・毎週生活記録表を提出させ、担任がコメントを記入することで、生徒の生活を見守っていくことができ、生徒の学習習慣の定着にも役立った。 ・自分の意見を書いたり発表したりする活動を通して、自ら考え取り組んでいく姿勢が育ちつつある。	○朝礼・終礼時に担任副担任で生徒を見守る取組は非継続してほしい。 ○毎週的生活記録表の提出はとてよい取組である。 ○期限を守り、提出させることは責任感を育てることもとても意味があると思う。	B
特色づくり	・3年間が見通せる「学びと成長」のストーリーを構築する。 ・生徒が一人一役を担う特別活動により、主体性を育む。	・一枚画を作成し、可視化する。 ・各取組の目的を明確にし、整理・連携して計画を立案する。 ・共通理解を図りながら実施・振り返りを行う。	4：全取組の9割以上について共通理解を図りながら立案・実施・振り返りができた。 3：全取組の7割程度について共通理解を図りながら立案・実施・振り返りができた。 2：全取組のおよそ半数について共通理解を図りながら立案・実施・振り返りができた。 1：共通理解を図りながら立案・実施・振り返りができたのが、全取組の半数未満であった。	3	コロナ禍で不確定要素が多い状況の中、生徒の3年間の学びと成長を見通せるように一枚画にして共通理解や連携が図れるように推進課から相談・連絡はできたが、他分掌との調整がうまくいっていない部分があり、行事やLHRなど推進課の意図とは違うものになってしまったことがあるのが現状である。課題としては、年間を通じて各年次及び各分掌と綿密なPDCAを確実に実行することだと考える。	○コロナ禍という初めての中で取組はとて大変だったと思う。 ○「学びと成長」のストーリーを構築するということが主体性をもって自分を振り返り、次へのステップとしてほしい。	B
		・目的を明確にして、計画・立案する。 ・生徒の意見を取り入れるために、行事ごとにアンケートを実施する。	4：9割の行事においてアンケートの実施・集計・報告ができた。 3：7割程度の行事においてアンケートの実施・集計・報告ができた。 2：半数の行事においてアンケートの実施・集計・報告ができた。 1：アンケートの実施・集計・報告ができた行事が半数未満であった。	3	コロナ禍で様々な行事が中止・延期となったが、総合祭については、生徒の意見や考えをできる限り取り入れながら実施することができた。ただ、総合祭に限らず、いろいろな行事で一人一役を全校生徒が主体的に担うことができよう育むためには、行事の目的に応じて意見を出したり、意見を出すことで責任をもって計画や運営を担当したりなど、一歩踏み込んだ教師側のサポートが大切であると考えている。	○総合祭の展示やファッションショーはとてよかった。 ○評価制度を充実し、次年度の取組に反映していけばよい。 ○アンケート結果やその後の対応などを保護者にも知らせてほしい。	B

学校運営	総務課を中心とした、行事及び日程の効率的な遂行。	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの業務の精選と再構築を行う。 ・各課相互連携体制の強化を図る。 	<p>教職員アンケートによる</p> <p>4：肯定的評価が80%以上 3：肯定的評価が60%以上 2：肯定的評価が40%以上 1：肯定的評価が40%未満</p>	3	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員アンケートより「学校行事の精選について」72% 「臨時休校やコロナウイルス感染拡大防止対策の影響による行事の変更について」94% 「臨時休校やコロナウイルス感染拡大防止の影響による行事の削減について」89% 「行事運営に関する各課相互連携について」69%が肯定的評価であった。 ・大きな社会生活課題が出た中で、模索しながら持続可能な業務改善や行事対応をしたつもりであったが、分掌、学年団、教員間、対生徒の各視点では評価の低いものもある。情報発信や情報共有の方法に、それぞれの立場で改善の余地があると考えている。 	○コロナ禍で例年と違い大変だったと思う。平素からの指導に感謝している。	A
		保存データファイル形式の更新を行う。	<p>4：達成度80%以上 3：達成度60%以上 2：達成度50%以上 1：達成度50%未満</p>	4	<p>校務分掌の再編以降進めていたデータファイル形式の更新は年度末をもって完了する。今後の業務遂行がより円滑となる。</p>	○個人的には「一太郎」ソフトについても捨てがたいと思う。	
施設・設備	安心・安全な教育環境整備	校舎内外を点検し、危険個所の早期発見、早期対応に努める。	<p>4：毎月1回点検し、十分な対応ができた。</p> <p>3：毎月1回点検し、7割程度について対応することができた。</p> <p>2：毎月1回点検できたが、半数程度について対応ができた。</p> <p>1：毎月1回の点検もできず、対応もできなかった。</p>	3	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に校内巡視・点検を実施し、一定の結果につながることができた。 ・今後も各課と連携を図り、効果的な改善に努めたい。 	○プールを修理する予定はあるのか。また、授業で使用するのは使用していない。授業で水泳をしなくなったのは体育祭が9月から6月に変更され、授業確保が困難となったためである。 ○現時点ではプールは防火水槽としての活用でよい。 ○洋式トイレへの改修もとてもよい。	B
業務改善	多忙化解消に向けた業務の効率	業務のスクラップ&ビルドを推進し、在校等時間を減らす。	<p>4：在校等時間が月平均45時間以上がない。</p> <p>3：在校等時間が月平均45時間以上が5人未満</p> <p>2：在校等時間が月平均45時間以上が10人未満</p> <p>1：在校等時間が月平均45時間以上が11人以上</p>	2	<p>令和2年4月から12月の在校等時間が45時間以上の教員数は延べ89人で平均9.9人(35.9時間)であった。コロナ禍での在宅勤務の影響もあるが、昨年度までの数値より改善している。今後も部活動指導等を含め業務改善をさらに進めていく。</p>	○簡単には解決できない課題であると思うが、さらなる残業短縮を望む。 ○部活動による超過は仕方ないと思う部分もあるが、さらに削減に向けて努力を続けてほしい。	B
	勤務状況（健康で明るい職場づくり）。	福利厚生を進め、休暇等が取得しやすい職場環境をつくる。	<p>4：年休取得平均10日以上</p> <p>3：年休取得平均7日以上</p> <p>2：年休取得平均5日以上</p> <p>1：年休取得平均5日未満</p>	4	<ul style="list-style-type: none"> ・令和2年の年休取得の平均日数は10日以上であった。 ・引き続き、教職員の心身の健康保持のため、休暇等が取得しやすい環境づくりに努めたい。 	○特になし	

5 学校評価総括（取組の成果と課題）

○学習指導については、学力向上を図る上でも家庭学習習慣の確立を目標に掲げ、各教科の授業や課題研究における宿題や週末課題を工夫した。また、スタディサブリの視聴状況を確認する中で3年次生では視聴状況が停滞したという課題も残っているが、概ねこまめに声掛けを行うことで家庭学習習慣の定着を図ることができた。引き続きこの取組の継続を進めていきたい。

○コロナ禍による「体育祭」の中止や制限がある中で開催した「総合祭」など生徒会行事において生徒の自主的な企画・運営は目を見張るものがあった。今後はボランティア活動や生徒会役員のリーダーシップによる活動をさらに充実することで生徒が生き生きとした学校生活を過ごし、地域とともに活動する活気のある学校づくりを進めていきたい。

○生徒の進学・就職に向けた指導については、今年度はコロナ禍という例年とは違った厳しい状況にありながら概ね希望進路の実現を達成することができた。そのような中で、従前の進路指導に係る目標については、生徒一人ひとりの個性や適性を踏まえた指導や個別面談による進路意識の高揚に取り組んできたが、目標数値に到達することができなかった。来年度は教職員による積極的な声掛けや生徒が主体的に取り組める指導計画を構築していく。また、本校の多様な進学状況（特に増加が予想されるWEB面談）への対応にも取り組んでいきたい。

○学校運営においては、新型コロナウイルス感染防止に伴い危機管理体制の構築を行い、生徒及び教職員が安心して学べる環境づくりを進めてきた。しかし、行事の運営を連携体制のもと取り組んできたが、依然として一部教職員への業務負担の集中が解消できていないため、次年度は分掌間連携をさらに推進していきたい。

○教員の働き方改革への取組については、ノー残業デーの設定や部活動休養日の設定（一部の部活動ではまだ実現できていない）等により平均時間外在校等時間が平成28年度比30%減は達成できている。また、時間外在校等時間の100時間超、80時間超過者は前年度比1/3に減少している。しかし、依然として月平均45時間を超える長時間業務者が1割程度存在する現状を踏まえ、教職員のワークライフバランスを意識し、部活動等の運営方針について再考するなど改善の余地があると考えている。

6 次年度への改善策

○授業で行う内容を予習課題として提示したり、課題研究においては計画に基づいた課題の作成づくりを宿題としたりすることに加え、スタディサブリを有効に使うことで家庭学習習慣の定着を図ることで基礎学力の向上を進める。

○GIGAスクール構想による大型提示装置や一人一台パソコンの導入でさらなるICTの活用や「学ぶ力」「考える力」「表現する力」の育成に向けて、やまぐち教育先導研究室（YELL）が発信している授業展開の好事例を参考にしたり、他校の授業見学を積極的に行ったりすることで教科指導力の向上を図る。

○生徒が生き生きとした学校生活を進めていく上でも、いじめアンケートやFitの数値に現れない生徒の悩みや訴えに対し、スクールカウンセラー（SC）や教育相談担当教員を含め、これまで以上に教員間の情報共有の充実を図る。

○1年次から積み上げたキャリア教育の取組による成果に加え、早期の段階から進路ガイダンスや進路カウンセリングをきめ細やかに行うことで個に応じた進路実現に向けた指導を実施する。また、コロナウイルス感染拡大防止のためオープンキャンパス等が制限されている中、高校として可能な限りの情報収集を行った上で、生徒・保護者に対して情報提供に努める。

○迅速な意思決定と業務改善を両立させるため、職員会議の議題を事前に協議する運営委員会以外にも、校務分掌や年次間のさらなる連携を図るための会議を設定（企画委員会：仮称）するなどして円滑な学校運営を図る。

○教員の働き方改革に向けて、教員のワークライフバランスを考慮し、持続可能な学校運営を進めていく中で、会議時間の短縮や部活動活動方針に基づいた適切な運営を積極的に推進していくなど改善を図る。